

■ 編集だより

編集後記

寒さ厳しい時期ですが、会員の皆様には益々ご健勝のことと存じ申しあげます。

すでに何度か編集後記でも取り上げられていますが、2014年4月から本誌のオンラインジャーナルが配信されています。会員の皆様は、ネットに接続できる環境にあれば、会員専用ホームページにログインすることで、本学会誌の最新号のPDFを、いつでもどこでも読むことができるようになりました。

筆者は、平成25年12月より編集委員に加えていただき、今回が初めて編集後記の執筆機会となりました。執筆にあたり諸先輩方による最近の編集後記を参考にすべく、金沢出張の特急はくたかの中でスマートフォンからPDFをダウンロードいたしました。揺れの大きい在来特急の中では気分が悪くなるのではないかと多少不安もありましたが、画像を拡大することで特に大きな問題なく読むことができました。このような不安も本年3月に北陸新幹線かがやきが開業されることで解消され、金沢出張がますます快適なものとなることでしょう。本年1月号より本誌は、オンラインジャーナルを基本として発行されております。まだオンラインジャーナルにアクセスされていない会員の皆様も是非ご利用いただき、皆様のライフスタイルに応じた便利な利用法が見つかるとうれしいです。

新しい技術が普及すると、ライフスタイルにも変化がみられます。本誌では、平成24年8月から投稿システムもオンライン化しており、毎月第一土曜日に開催される編集委員会も、WEBカンファレンスでの参加が可能となりました。オンライン化が進むことで、自宅で自分のペースでできる仕事も増え、早めに帰宅するようになりました。土日開催の多い本学会委員会への参加も自宅から可能となり、家族と過ごす時間を減らさずにすむようになった委員もいらっしゃるでしょう。これらの変化は時代のニーズに沿ったもので、男性の育児参加、いわゆるイクメンの増加にもつながることでしょう。精神医学にバイオ・サイコ・ソーシャルモデルがありますが、家族や社会のあり方が変わること、心理学的にも生物学的にも何らかの変化がもたらされ、精神医学のあり方も変容するかもしれません。

本号は、新しい生理学的手法を用いた論文を多く掲載しております。これらの技術は、20年ほど前から精神科での臨床応用の可能性について地道な検討が続いておりました。その努力が実り、光トポグラフィは、抑うつ症状の鑑別診断の補助としての使用が保険診療として実用化しました。また、経頭蓋磁気刺激法は、検査と治療の両方の用途が期待されますが、国内導入のためには引き続き安全性や適正使用に関する議論の蓄積が求められています。筆者は児童思春期精神保健に現在従事しておりますが、例えば、児童思春期の抑うつ例にも経頭蓋反復磁気刺激療法が有効であったという海外の報告はあります。しかし、児童思春期のうつ病性障害の国内外のほとんど治療ガイドラインでは、まず心理社会的介入が求められ、薬物療法など生物学的な治療法は次の段階に位置づけられることが多く、この中に経頭蓋反復磁気刺激療法を組み込むとすれば、やはり難治例・抗うつ薬治療抵抗例に対する適応ということになり、このあたりの知見の蓄積を今後も十分慎重に進めていく必要があると考えられます。本号の特集が会員の皆様の新しい生理学的手法に対する理解を深め、議論が一層活発になる一助になれば幸いです。

高橋秀俊